

-平成24年度・夏期特別展-

# 袋井の名宝展

2012年

袋井市歴史文化館



佐藤靄子『父川村驥山』 1975年 より

# かわむらきざん 川村驥山

昭和を代表する天才書道家。明治15年（1882）5月20日、静岡県磐田郡久努村<sup>くど</sup>村松（袋井市村松）に川村東江の長男として生まれる。名は慎一郎、姉2人、妹1人。

3歳の頃から父に書と漢学を習う。5歳の時、代表作「大丈夫」を披露。また、可睡齋方丈<sup>にしありぼくざんぜんじ</sup>西有穆山<sup>かつもくじんじょう</sup>禅師より般若心経を学ぶ。7歳の時、刮目尋常小学校（現袋井東小学校）に入学、2年間で4年の課程を終了、太田竹城の書塾に入門し3年間学ぶ。10歳にて二葉と号し、静岡県知事小松原英太郎の推奨により県下の小学校を豆書家として巡講、模範<sup>きごう</sup>揮毫し神童と呼ばれる。12歳の時、明治天皇銀婚式に楷書「孝経」、草書「出師表」を暗書して献上天覧の栄に浴す。

明治30年（1897）、15歳で書家として独立し全国行脚に旅立つ。19歳の時、小室屈山<sup>こむろくつざん</sup>に師事し号を「驥山」と改号、披露<sup>かすいさい</sup>を可睡齋で催した。21歳の時、高野山に籠もり100日間にわたり弘法大師の研究に没頭し、以後、九州、神戸、そして中国に渡り書法を研究しながら、書道界の発展に尽くした。

昭和20（1945）に東京空襲を避けて長野<sup>しののい</sup>県篠ノ井町（長野市篠ノ井）<sup>そかい</sup>に疎開する。昭和25年、日展に書道が参加し参与審査員となる。昭和26年5月16日、書道界初の日本芸術院賞を受賞する。昭和41年、85歳で勲三等瑞宝章を授与する。昭和44年（1969）4月6日、88歳で死去。絶筆<sup>ぜっぴつ</sup>「心」を残す。従四位に叙せられる。

油山寺に生誕地碑、墓地、驥山門等がある。驥山館には多数の作品が展示されている。

## 【参考・引用文献】

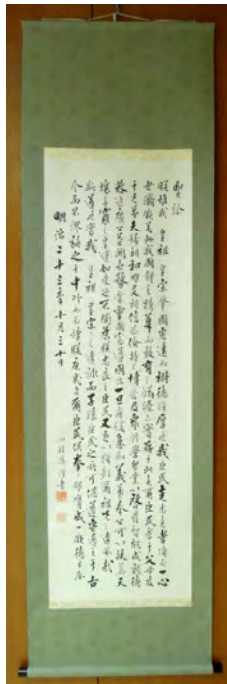
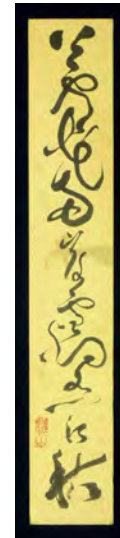
佐藤靄子 『父川村驥山』 1975年

かわむらきざん  
**【川村驥山】**

たんこうしょくじしほんぼくしょ  
 22 「淡紅色地紙本墨書」 (縦 36 cm × 横 6 cm)

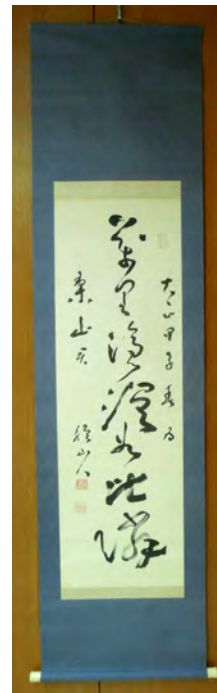
薄紅地に「蘆花兩岸雪灼然江秋」と草書で一行書きさ  
 れている。(蘆の花が川の兩岸に雪と見間違えるばかり  
 に咲いている。川辺の秋は今、輝くばかりに美しい)

裏面には朱筆で「川村驥山氏 遠州人東京住 小室屈  
 山門」と記されている。



しほんぼくしょそうしよきよういくちよくご  
 23 「紙本墨書草書教育勅語」  
 (縦 164 cm × 横 51 cm)

草書体で書かれた教育勅語で、  
 川村驥山 30 歳頃の作品で、「  
 川村慎印」「驥山」の落款も鮮  
 明である。



しほんぼくしよいちぎょうかんし  
 33 「紙本墨書一行漢詩」 (縦 192 cm × 横 49 cm)

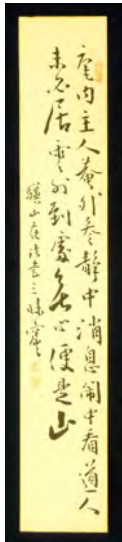
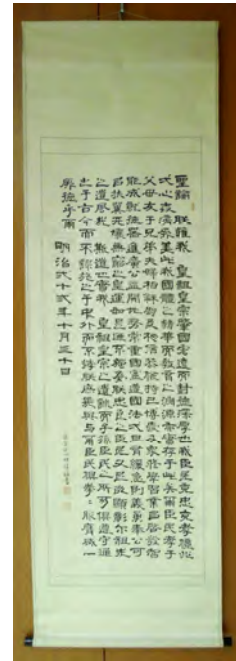
紙本に書かれた漢詩で、川村驥山 43 歳頃  
 の作品。漢詩は「万里隱溪如比隣」(万里  
 の暗緑色の海はこのようですか)とあり、  
 驥山の作と考えられる。桑山氏あてに大正  
 13 年(1924)に筆を執ったもので、この年は、  
 驥山が東京都杉並区和泉町に転居した年に  
 あたる。

しほんぼくしよれいしよきょういくちよくご  
42 「紙本墨書隸書教育勅語」(縦 100 cm×横 50 cm)

れいしよたい きょういくちよくご  
隸書体で書かれた教育勅語で、驥山 30 歳頃

の作品と考えられる。

そうしよ れいしよ  
草書を得意とした驥山の数少ない隸書の作品  
である。



しほんしろじぼくしよかんし  
47 「紙本白地墨書漢詩『庵内主人』」(縦 36 cm×横 6 cm)

ぎょうしよ かんし  
行書によって書かれた漢詩である。

「庵内主人庵外参静中消息閑中見道人

末必居雲外到处無心便是山」

「驥山在法庵三昧窟」

しほんしろじぼくしよかんし  
48 「紙本白地墨書漢詩『雖有城』」(縦 36 cm×横 6 cm)

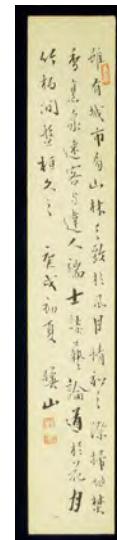
ぎょうしよ  
行書によって書かれ、

「雖有城市有山林之到於風月情和之際掃地焚

香烹泉速客与達人瑞士談藝論道於花月

竹栢間盤桓久之 庚戌初夏 驥山」

明治 43 年の初夏、驥山 29 歳に書いたものである。



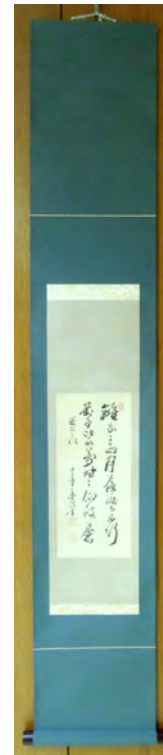
53 「紙本墨書二行漢詩」 (縦 35 cm × 横 16 cm)

「驥山」を襲名する前の作品と考えられる。

菅原道真作 『菅家後集』

「離家三四月涙落百千行  
万事皆如夢時時仰彼蒼」

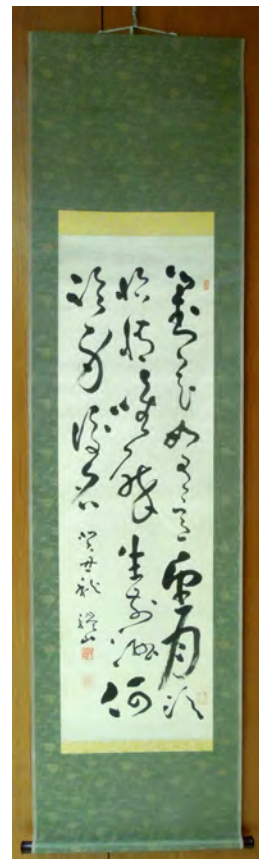
自宅を離れてから三四か月が過ぎ、落ちる涙はとめどなく流れる  
過去のことはすべて夢のようで、今は時々あの青い天を仰ぐだけである。



56 「紙本墨書三行漢詩『对花如有意』」 (縦 188 cm × 横 49 cm)

大正二年、驥山 32 歳の作品と考えられる。

「对花如有意望月須  
怡情唯醉生前酒何  
臨身後名 癸丑秋」 驥山



あだちせつざん

# 足立雪山

足立雪山は袋井市指定文化財「蜀栈道図」<sup>しよくさんどうず</sup>の作者。弘化2年（1845）周智郡山梨町山科<sup>ひらう</sup>（平宇）の足立三家のうち、中店（孫八家）の当主、甚五郎の四男として生まれた。本名は孫吉。この頃、足立本家（孫六家）は子供が恵まれず、孫吉の幼少時に本家の養子となった。しかし、孫吉が3歳の頃に本家に女兒が生まれたため、長じて分家し紺屋を営むことになった。



孫吉は見附の絵師・福田半香<sup>えし ふくだはんこう</sup>に画を学び、特に山水<sup>さんすい</sup>に長じ、技術的にも優れ、達筆な画家として多くの作品を残している。このうち、「蜀栈道図」は袋井市指定文化財にもなっている。雪山門下には天竜市二俣の佐々木竹華がある。雪山は渡辺華山門下<sup>わたなべかざん</sup>、十哲の一人、永村茜山<sup>ながむらせんざん</sup>（島田市金谷町）を慕っていたが、茜山の死後の明治32年9月、金谷に遊び土地の有志と図り城山公園に茜山の顕彰碑を建立した。また、明治41年に、遠州三河を中心とした画家たちで組織された東海絵画協会に属し、重鎮として遠州画壇を背負って活躍した。

雪山の画風は主に山水に力作が多いが、人物画や花鳥も良い作品を残している。絵はいわゆる文人画といわれる南画が主体で、技巧的にも秀で力強い筆致の輪郭線や、しっとりとした落ち着いた色彩は、雪山の人柄を偲ばせる。現在、雪山のコレクターが所蔵する作品の多くは雪山晩年の作品であるが、若年時は稼業の紺屋の関係もあり、多くを描けず晩年になってようやく絵に専念できる生活になったと思われる。大正10年（1921）3月10日、風邪で体調を崩し没する。享年76歳。

## 【参考・引用文献】

澤田与茂治 1988 「画家足立焼山翁の略歴並びに業跡」 『ふるさと袋井第3集』  
袋井市地方史研究会

中道朔爾 1986 『遠州画人伝』

【協力】平宇・足立家



あ だ ち せ つ ざ ん  
【足立雪山】

けんぼんすいぼくたんさい しゅうけいざんすいず  
27 「絹本水墨淡彩 秋景山水図」

(縦 165 cm × 横 50 cm)

「秋景山水図」は、足立雪山の晩年 73 歳に描かれた袋井市指定文化財「蜀栈道」が画面全体に描かれているのに対して、余白を意識的に風景に取り込んで、軽快なタッチで描いている。



しほんすいぼくたんさい しゅうかえんせきず  
28 「紙本水墨淡彩 樹下宴席図」 (縦 165 cm × 横 50 cm)

「樹下宴席図」は、画面中央に 7 名の人物を配し、左側には柳の古木が描かれ、余白を意図的に風景に取り込んで、軽快なタッチで描いている。

けんぼんすいぼくたんさいせいえんがしゅうしゅうのず  
101 「絹本水墨淡彩西園雅集之図」

(縦 222 cm×横 83 cm)

たいふくさんすいかいが けんぼん  
「大幅山水絵画」は、絹本に描かれており、別名「西園雅集之図」(中国の宋の時代 [960～1279年]、円通大師が当時の文化人達を西園に集めて、文を作ったり、詩を作り絵を画いたり、書を書いたりして、一日を楽しく過ごしたと伝えられている様子を描いたもの。)と呼ばれている。

大正7(1918)年秋に描かれた。画面には、<sup>せいこ</sup>西湖(中国浙江省杭州市)に注ぐ小川を挟み見物する人物に囲まれ、書を記す人物や湖岸で楽や書を楽しむ人物を描いている。



じんぶつふなわたしが  
102 「人物舟渡し画」(縦 83 cm×54.5 cm)

「人物舟渡し画」は、「大幅山水絵画」や市指定文化財「<sup>しよくさんどう</sup>蜀栈道」とは異なるタッチで、余白を意図的に風景に取り入れ、雄大な風景が墨の濃淡により描き出している。画面中央には従者を従え、<sup>かりぎぬたて えぼしすがた</sup>狩衣立烏帽子姿の貴族が、老齡の<sup>せんどう</sup>船頭が操る船で湖上を遊覧する姿を描いている。





いまがわさだ よ りょうしゆん ほうしよ  
97 今川貞世（了俊）奉書

（縦 111cm×横 56.2cm）

袋井市堀越に晩年を過ごしたと伝えられる今川貞世（了俊）が、室町幕府の引付頭人であった時の文書です。

貞治六年（1367）十月二十八日、醍醐寺報恩院の雑掌が、醍醐寺領摂津国平駄足庄に対する横暴を訴えたので、その訴人に、京にある訴訟の場へ赴くよう命じた召文である。



いまがわさだ よ りょうしゆん かきくだし  
69 今川貞世（了俊）書下

（縦 103cm×横 51.7cm）

袋井市堀越に晩年を過ごしたと伝えられる今川貞世（了俊）が入江庄三沢（清水市）に関して記したもので、『静岡県史資料編 6』中世二の 1227 番の文書として掲載されているものです。

今川貞世関係文書は現在 491 通確認されていますが、県内関係のものは数点しかなく、その中で花押入りの書下は 96 通が現存し、この文書はその内で現存する最後の可能性のあるものとしても極めて重要と考えられます。

この書下は、本来駿河伊達文書（京都大学蔵）の一部であったと考えられますが、いつしか単品で出回ってしまったと考えられるもので、この文書に記されている年号「応永五（1398）年四月十一日」は貞世が遠江と駿河の半国守護の職にあった時期と考えられます。



—平成24年度・夏期特別展—

袋 井 の 名 宝 展

〔展示解説〕

平成24年7月28日

編 集 袋井市歴史文化館